様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ７ 月 １２ 日現在

機関番号：３４５１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３５０９５３

研究課題名（和文）父親の養育性と役割取得を促す発達教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of learning programs for developing fathers' nurturance and role-taking

研究代表者
寺見　陽子（TERAMI, YOKO）

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：２０１６３９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、父親の養育性・役割取得を促す発達教育プログラムを開発することを目的とした。方法は、乳幼児をもつ父親・母親に、属性と自身の被養育経験、養育経験、養育性、子ども像、育児ストレス、育児・家事への関与程度、育児意識、役割意識、育児サポート、子どもとの時間と育児休暇、父親の必要条件、愛着傾向、夫婦関係、自己変化、自分自身のこと、父親支援講座の参加経験と希望講座内容・日程、父親観・母親観に関するインタビューとアンケートを実施した。インタビューの質的分析とアンケートによる因子構造分析からプログラム構成の視点を導出してワークブックとプログラムを構成、その実践をとおして、妥当性と効果の検証を行った。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to propose relevant learning programs for promoting Japanese fathers’ nurturance and role-taking. We asked mothers and fathers rearing babies and infants, through questionnaire and interviews, the following questions; properties, histories of bringing up, experiences of taking care of children, nurturance, attachment, images of children, stresses of childcare, involvements of housework and child-rearing, attitudes and awareness of childcare and parental roles, environments of supporting about childcare, spending with their children, lives of childcare, marital relationships, changing themselves through child-rearing, views and evaluations of ‘being parent’,experiences of participation in any parenting seminars and their needs for seminars. Analyzing these data, we induced several viewpoints to allow us developing programs to promote fathers’ nurturance and role-taking, besides verifying their validities and effects through practicing them.

研究分野：子ども学

キーワード：父親　養育性　役割取得　育児参加　成育経験　夫婦関係　ソーシャルサポート　支援プログラム

１．研究開始当初の背景

今日、核家族化・少子化によって人間関係が希薄化し、育児の孤立と親の育児不安や養育不全を招いている。これを社会全体の問題として捉え、地域家庭の教育力の再生と親の養育性の向上を図る様々な取り組みが国全体で行われている。特に、父親の育児参加が重視されている。しかし、父親の育児参加の効果やその在り方については、まだ十分な検討がなされていない。父親の育児生活や育児意識、その背景に関する研究も十分でない。

これまでの父親研究を概観すると、①母親サポート源としての父親研究②子どもと父親との関係に関する発達的研究③親としての成長・養育性に関する研究④親の育児ストレス⑤親になることへのサポート等の視点から行われている。これらの研究から、父親の役割には「稼ぎ手」「社会化の担い手」「世話の担い手」の３つの側面があり、母親に比べ父親の役割取得にはずれがあること、父子関係の良好さや子どもの性別によって発達が異なること、共働きの父親は片働きの父親より葛藤が大きく、その軽減を図る方略が必要であることなどが明らかにされている。

筆者らが行った母親研究では、母親自身の父親との良好な関係が、夫の協力、地域活動への参加、親や友人からの育児情報と関連し、母親の育児不安・ストレス（育児拘束感や当惑感）も母親自身の父親との良好な関係と関連していた。また、地域活動への参加や育児情報の入手とも関連し、それが育児における孤立に連動していた。こうした母親研究の知見をもとに行った大学生の次世代の親としての意識とその関連要因に関する調査でも、「親との孤立度」および「父親の存在感」が、大学生の養育性形成と関連していた。親との良好さが多世代との交流への積極性や抵抗感の低減と関連していたことから、多世代交流経験が自身の親との関係変容に繋がるのではないかと推測された。こうした結果は、今日求められている父親の育児参加が、単に母親のサポート源となることを超えて、今の育児されている子どもも次世代の親としての資質を獲得するために重要であることを示唆している。

２．研究の目的

従来の研究結果を根拠として、父親と子どもとの良好な関係を構築する養育性と役割取得を促す教育プログラムの開発を行う。

３．研究の方法

(1) 父親の成育経験並びに育児する生活の実態及び育児意識に関するインタビュー調査

①調査目的：現実の父親の育児生活の実態を把握し、質問紙項目作成の知見を得る。

②調査協力者：乳幼児期から大学生までの子どもの父親 8 名。年齢は 30～40 代。

③調査方法：調査協力者が指定する場所において、1 名 1～2 時間の半構造化面接を実施。協力者の許可を得て IC レコーダに録音。協力者には、研究の趣旨及び目的、プライバシーの保護、権利の保障、データ保管方法、研究成果の公表方法等について、口頭及び文書にて説明し、研究同意書を取り交わした。実施期間は、2013 年 12 月~2014 年 8 月。

④調査項目：日常の家事や育児行動、子どもを持つ前と後の変化、パートナーとの関係、パートナー以外の家族（親族）との関係、職場の関係や地域とのつながり、自分の親との関係、子育ての楽しさや悩み、他であった。

⑤分析方法：録音の逐語録を 2 名の研究者で読み込み、インタビュー項目毎に各協力者の語りの内容をサブカテゴリー、カテゴリーに分類した後、各カテゴリーの内容を特徴づけるエピソードを関連付け、解釈を行った。

(2) 父親の成育経験並びに育児する生活の実態及び育児意識に関するアンケート調査

①調査目的：父親の養育性・役割取得を促す発達教育プログラム作成の基礎資料を得る。

②調査協力者：乳幼児の父親・母親 995 組

③調査方法：質問紙法。質問紙は保健センター・幼稚園・保育所を通して 4500 部配布、郵送にて回収。回収率は 992 部(20.6%)。

＜質問項目＞属性、PBI 尺度（Prker,G., Tupling. H. & Brown, L. B., 1979）、愛着尺度（詫摩・戸田、1989）、養育経験尺度（棚沢、2012）、夫婦関係満足尺度（QMI：Quality Marriage Index）、母親用育児ストレス尺度（牧野、1982）、父親用育児ストレス尺度（冬木、2008）を使用。仕事観、子ども観、育児意識と行動、役割意識と行動に関する項目と父親支援講座への参加に関する項目は、先行研究並びにインタビュー結果を基に研究者で協議し作成した。

(3) 父親の養育性及び役割意識を促す発達教育プログラムの開発と実践、成果の評価

①目的：父親の養育性・役割取得を促す発達教育プログラムの内容、実施方法、妥当性、効果を検討した。

②方法：インタビュー調査と質問紙調査の結果を踏まえ、家族参加型プログラム、家族参加型プログラム、かかわり体験型プログラムの３タイプを作成し、乳幼児を持つ父親と家族を対象に実践、参加者に事後評価を求めた。

４．研究成果

(1) 今日の父親の子育て生活の実態と意識 ―インタビュー調査の結果と考察

調査協力者は全員常勤職、パートナーは家事育児の専業主婦（育休取得含む）であった。家事育児は主にパートナーが行い、父親は週末や休日に手伝うという程度であった。育児も子どもの世話や遊びが中心で、妻の家事や育児をサポートするという意識が強く、それ

が夫の役割だと感じている者が多かった。しかし、子どもに関わりたくないとか積極性がないというわけではなく、子どもが生まれたことで、生まれる前よりも子どもは可愛いと感じ、育児への関心が高まり、子育ては自分を成長させるという意識の変化が見られた。パートナー以外の家族（親族）は、いざというときに援助してもらう関係と理解していた。また、職場でも同年齢の子どもがいる同僚と話をする、地域参加も家族で参加できるイベントがあれば出かけるという程度で、地域の他家族との交流は少なかった。時間的制約もあり、できる限り他者には頼らず夫婦 2 人で子育てをしようとしていた。また、自分の親とのかかわりについては、父親によくかかわってもらったケースと、父親とのかかわりが薄かったケースとがあった。よくかかわってもらったケースでは、父親に対して感謝の気持ちを持っており、かかわりが薄かったケースでは、反面教師として父の姿を重ねたりしていた。特徴的なことはどちらのケースも調査協力者が子どもだった頃（1970-80 年代）の日本社会は性別役割分業型の家族が標準的であったため親としてのモデル（父親と母親の役割）もそれに準拠しようとしていた。

＜考察＞父親たちは、子どもを可愛いと思い、自分が父親であるという自覚を持ち、育児にも自分ができる範囲で積極的に関わろうとしていた。自分たちの父親よりも子どもに関わる父親であろうとしていた。だが一方で性別役割分業型の夫婦（父母）役割に準拠し、ワーク・ライフ・バランス型の家族形成ではなかった。今後の子育て支援には、性別役割分業モデルを超えた「養護性発達の支援」（柏木 2013）が求められる。

(2) 今日の父親の養育性・役割意識とその背景－アンケート調査結果の分析と考察

①今日の父親の養育性を規定する要因

＜分析結果＞養育性では、「子どもや育児」に関する 21 項目に因子分析（最尤法・プロマックス回転：以下同じ分析）を実施した結果、第 1 因子から順に「育児への自信」、「子ども好き」の 2 因子が抽出された。被養育経験では、母親・父親の各 25 項目の因子分析の結果、「母親との関係」では第 1 因子から順に「親和的」「過保護・統制的」「子ども中心」「冷淡さ」の 4 因子が抽出され、「父親との関係」でも同 4 因子であった。子育て生活では、子育て生活への実感に関する 12 項目の因子分析の結果、第一因子から順に「疲労感」「育児不全感」「イライラ感」の 3 因子が抽出された。それらの因子と親役割得点（父親が親としての生活と親としての自分をどのように感じているかの 2 項目の評定値合算）との関連の因果モデルを作成し、Amos22 を用いて共分散構造分析を行った。その結果、最終的に図 1 に示す因果モデルが適合した。モデル適合度指標(GFI＝.953,AGFI=.933, CFI=.969, RMSEA＝.041)から、データとモデルの当てはまり具合は良好であった。図 1 に示されたパス係数の値は標準化係数であり、すべて有意であった。

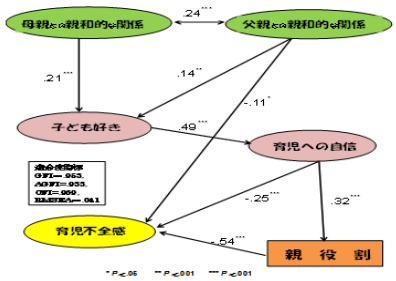


図 1　父親の養育性を規定する諸要因の構造
（←→は共分散を示す；　数値は標準偏差）
（日本発達心理学会第 27 回大会、2016）

子どもやペット等の養育経験との関連は、乳幼児とのふれあい経験やペット等の養育経験の「あり群」と「なし群」に分け、各群の養育 2 因子の項目合計得点の平均値の差を検討した。その結果「育児への自信」〔$t(710)=2.984, p<.001$〕、「子ども好き」〔$t(569)=3.16, p<.01$〕において有意な差が認められた。すなわち、幼少期に子どもとのかかわりやペット等の養育経験をもつ父親は、ない父親よりも育児への自信があり、子ども好きであった。養育経験の時期（小学校、中学校、高校）による差異は認められなかった。

＜考察＞父親自身の「母親との親和的な関係」が「子ども好き」に繋がり、それが「育児への自信」から「親役割」達成の実感へ、さらに「育児不全感」の低減に繋がることが示された。また、父親自身の「父親との親和的な関係」は、「子ども好き」と同時に「子育不全感」の低さとの関連していた。父親の「母親との親和的な関係」は養育性形成と親役割に、父親の「父親との親和的な関係」は子育て生活の負担低減に繋がるのではないかと推察された。また、父親の養育性形成は、成育過程における子どもとのふれあい経験やペット等の養育経験と関連し、親になるまでに養育経験を持つ必要性が示唆されたが、養育経験の積み重ねの程度とも関連すると考えられ、今後検討を要す。

②今日の父親の育児行動を規定する要因

＜分析結果＞「母親との関係」についての 25 項目と「父親との関係」についての 25 項目に対して因子分析（最尤法・プロマックス回転：以同じ分析）を行い、「母親との関係」では第 1 因子から順に「親和的で優しい母」「過保護で統制的な母」「自由にさせてくれる母」「冷淡な母」の 4 因子が抽出され、「父親との関係」でも同 4 因子が確認された。「子どもや育児」における愛着に関する 21 項目では、第 1 因子から順に「安定的愛着」「回

避的」「アンビバレント」の 3 因子が、「子どもや育児」に関する 21 項目では、第 1 因子から順に「育児に対する自信」「子どもが好き」の 2 因子が抽出された。父親の育児行動を規定する要因を明らかにするために、これらの因子と、「良好な夫婦関係」得点（夫婦関係の 6 項目の評定値合算)、「育児行動」得点（実際の育児行動 9 項目の評定値合算）を基に因果モデルを作成し Amos22 を用いて共分散構造分析を行った。その結果、図 2 に示される因果モデルが適合した（GFI＝.955, AGFI=.932, CFI=.965, RMSEA＝.049)。図 2 のパス係数値は標準化係数であり、すべて有意であった。

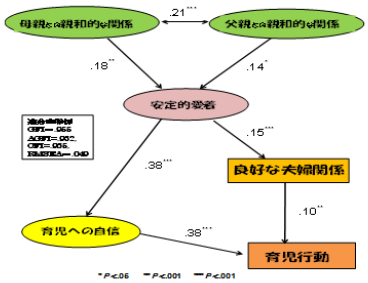


図 2 父親の育児行動を規定する諸要因の構造
←→ は共分散を示す： 数値は標準係数）
（日本発達心理学会第 27 回大会、2016）

＜考察＞父親自身の自分の母ならびに父との関係が親和的な場合、父親は安定的愛着を示し、「育児に対する自信」があり、その自信が「育児行動」につながることが示唆された。また、安定した愛着をもつ父親は妻とも良好な関係にあり、そのような妻との良好な関係を通して父親は実際の育児を行うことが示された。このように子育て中の父親の育児行動の基礎に、父親自身の両親との関係性が関連しており、それが他者との関係性に影響を与え、それによって実際の育児行動が規定されることが推測された。

③父親の養育性・役割意識と夫婦関係・育児サポートとの関連

＜分析結果＞「養育性」が「夫婦関係」及び「支援希求（相談）」を媒介変数に「育児行動」が誘発され、それが活発化するほど「役割意識」が高まるという因果モデルを作成し、Amos23 を用いて因子分析（最尤法・プロマックス回転）と共分散構造分析を行った。親の養育性では第１因子から順に「育児への自信」、「子どもへの関心」、被養育経験では、「母親との関係」は第 1 因子から順に「親和的」「過保護・統制的」「子ども中心」「冷淡さ」、「父親との関係」、「父親との関係」でも同様の因子が見いだされた。愛着については、第１因子から順に「安定的愛着」「回避的」「アンビバレント」の 3 因子が抽出された。これらの因子と「良好な夫婦関係」（夫婦関係に関する 6 項目の各評定値の合計)、「育児行動」（入浴、食事の世話など実際の育児に関する 9 項目の各評定値の合計)、「支援希求」得点（父親が育児に困った時に相談する対象（15 項目）ごとの評定値の合計)、「役割の自己認知」（現在の自分が、親としての生活と自分自身をどのように感じているか 2 項目の各評定値の合計）との関連を共分散構造分析で検討した結果、図 1 に示す因果モデルが適合した。モデル適合度指標(GFI＝.966,AGFI= .947,CFI=.970, RMSEA＝.042)の適合度は良好であった。図 3 のパス係数値は標準化係数であり、すべて有意であった。

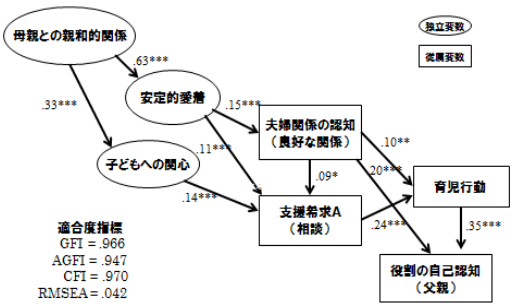


図3 共分散構造分析の結果
(*p<.02 ** p<.01 ***p<.001)

＜考察＞父親の「養育性（子どもへの関心）」は、「夫婦関係（良好な関係）」及び「支援希求（相談）」を媒介変数に「育児行動」を誘発し、それが活発化するほど「役割意識」が高まるというモデルが立証された。さらに、「養育性（子どもへの関心）」は父親自身の母親との親和的な関係が関連し、媒介変数である「夫婦関係（良好な関係）及び「支援希求（相談）」は、母親との親和的関係によって形成された安定的な愛着が影響すると共に、「夫婦関係（良好な関係）」が「支援希求（相談）」に影響していることが分かった。また、「夫婦関係（良好な関係）」は、「育児行動」並びに「役割認知（父親）」の双方に影響を与えるとともに、相談行動を誘発し、育児行動に効果的に働いていた。つまり、父親の場合、育児の現実の局面では、「夫婦関係（良好な関係）」と「支援希求（相談）」が「育児行動」に重要であり、それが、父親としての「役割の自己認知」を高めることが示唆された。その機序には、父親の「子どもへの関心」の高さと「安定的な愛着」が関連しており、両者が「支援希求（相談）」を誘発し、「育児行動」を高め、父親自身の「母親との親和的関係」がそれを支えていた。

(3) プログラムの構成と検討

本研究の結果から、父親の「育児行動」と「役割の自己認知」を高めるには、子どもへの関心を高め、親密な関係を形成する機会を持つこと、我が子との親密な関係を夫婦で形成すること、父親自身の親(祖父母)との親密な関係を再構築する機会を持つこと、そうし

たことを通して父親の安定的な愛着形成を図ることの重要性が示唆された。また、そうしたことが、我が子が将来、親になる基盤として重要であることも指摘できる。そこで、これまでの父親研究から示唆されることを踏まえ、次のような観点から、実践を通して、父親の養育性と役割取得の育成を促す支援のあり方をA－Dの観点から検討した。

【A】 関係性を構築することを目的とし、父親の現実を踏まえ、必ずしも定型化しないプログラムのあり方を検討するー①今日の父親の現状を踏まえ形を求めない②かかわりを通した関係性の中で父親性を意識化する【B】父親の養育性と役割取得を促すための具体的な内容を検討する－①夫婦や家族間の受容的・共感的関係とその関係性の中での父親の自己存在感②一緒に過ごす（楽しみや感情の共有、興味・関心の共有等）③父親と子どもが二人だけで過ごせるようになる④父親が子育ての知識と技術を獲得する⑤父親自身の振り返りと父親（母親）の内面理解⑥父親（の人生）と育児生活【C】父親だけを対象とするのではなく、夫婦、家族の関係性を検討する【D】父親の成育経験や同性の親との関係性を検討する

①夫婦参加型プログラム

＜目的と方法＞「子どもが 0 歳代という早期（ただし、生後 5 か月以降）から、月齢に応じた乳児の発育・発達に関する理解を深めるとともに、乳児への対応方法・技能を高める」「子どもに一義的責任を持つ親としての自覚や自信を夫婦（男・女）ともに高める」を目的とした。参加対象者は 17 組の夫婦。5 月～12 月まで（8 月を除く）の第 2 土曜日 10：30～12：00 まで大学サテライト内の 1 室（多目的室）で実施された。各回のテーマは、乳児の月齢に応じた発育・発達を踏まえて決定し、その内容は親が子どもの発育・発達的変化に応じて知っておくべき知識・対応方法の習得が中心であるが、テーマに応じて自分なりに子どもへの対応のあり方を考えることも含めて構成した。受講終了後 1 週間後に、郵送によって参加した家庭（母親または父親が回答する）に講座の評価を依頼した。

＜結果と考察＞事後調査は 16 組から返送された。その記述内容を解釈的に分析し、考察した（詳細は論文(1)参照）。夫婦でのセミナー参加によって、「夫」の育児を学ぶ姿勢や子どもと実際に遊ぶという行動に結びついていること、「夫」が地域とかかわりを持てたこと（自己紹介をする・他の父親と交流する・地域の施設で子どもと遊ぶ）を「妻」が肯定的に評価し、父親中心プログラムを「妻」が求めるようになることが示唆された。

②家族対話型プログラム

＜目的と方法＞特定のテーマを契機にして子育ての多様性を理解しながら家族内と家族間のコミュニケーションを促進することを通して、家族全員が各自の状況を踏まえた上で、課題解決に向けて協力していく事を目的とした。参加対象者は、1 歳から 3 歳未満の子を育てている家族 8 組。開催時期は 10～12 月までの第 2 土曜日 13：30～15：00 で、大学サテライト内の 1 室（多目的室）で実施された。講座は 3 セッション（月 1 回第 2 土曜日・3 か月）からなり、i) 講師によるセミナー（保育士による幼児の躾、管理栄養士による食育、教育心理学者による家族関係）ii) 家族内での話し合いの時間、iii) ③家族間での話し合いの時間で構成された。試行実践の効果を検証するために事前アンケートと事後アンケートを実施した。

＜結果と考察＞記述内容を、しつけ、食育、家族関係の３点にまとめ考察した（詳細は論文②を参照）。3 回とも参加した家族（1 組）には、夫妻と子どもの行動面に大きな変容が見られ、また他の 2 組の家庭においても、夫または夫妻の行動面の変化が子どもの変化につながっていた。対象者が少ないので、結果から明確な一般化をおこなうことは難しいが、参加者らは、参加した回の内容（テーマ）について、それぞれ家族内でも話し合う傾向にあり、「家族内のコミュニケーションを促進する」という本プログラムの目的はほぼ達成できたと思われる。またセミナーに複数回参加することを通して、夫妻で話し合う機会を多く持てばもつほど、父親の養育性を高める効果が高くなる可能性が示唆された。母親のみに単独参加であっても、セミナーの内容について夫に伝えたり家庭内で話し合ったりする機会を設けて行動面での変化がもたらされた家庭もあり、父親の養育性を高めることへの一定の効果はあると思われる。

③かかわり体験型学習プログラムの試み

＜目的と方法＞父親と子どものかかわり体験を深め、子どもとのかかわり方を体験的に学ぶとともに、子育てに必要な知識や方法を学習することを目的とした。参加対象者は父子 2 組。プログラムは 5 回のセッションで構成され、午前 10 時 30 分から 13 時まで実施された、本講座で実施したプログラムの内容は、親子遊びでのかかわりと遊びの実際（技術）と子育てに関連した知識や困り感の解消に視点を置いた。親子遊びについては、乳幼児期に相応しい遊びの紹介にとどまらず、そうした活動を通して、どのようなコミュニケーションやかかわりのあり様が重要なのかを伝えるために、「身体的ふれあい」「視線の共有」「モノの共有」といったコミュニケーションの基本的行為を中心とした活動、やり取りにおける動きの「同型性（同じことをする）」「異型性（相手の動きに関連した異なっ

た動きをする活動)」を体験する活動、「相互性（相互に応答しあう)」「補完性（相手の動きを補完して応答しあう)」ことを体験する活動に視点を置いて、遊びを編成した。ワークショップでは、担当者が、参加者が自由に話す井戸端会議と子育てに関連する話題提供をした後、参加者同士の話し合いを展開する形を併用した。話題に出た内容は、本人、または記録者が付箋に書き、それを模造紙に張りながら話の内容を整理して課題の明確化を図り、それに基づいてコメントしていくようにした。その後、担当者による「子育てミニ講義」を実施した。本講座の 5 回のセッションでの実施内容はワークブックにした。講座の効果を見るために、事前アンケートと振り返りシートを、講座終了後には自由記述のアンケートを実施した。

＜結果と考察＞講座での親子遊びや体操の観察　振り返りシートのチェック項目、事後の自由記述を関連づけ、解釈的に考察した（詳細は論文(1)参照)。今回の取り組みから、父親支援プログラムは、プログラム内容やその展開を固定化しない非定型プログラムの必要性、 父親の子育て意識の変容と子育ての知識・技術の学び、子育て上の出来事の根拠が明確化、といった視点とそれに応じた内容の編成が必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

(1) 寺見陽子・南憲治・松島京・及川裕子・寺村ゆかの・伊藤篤．父親の養育性・役割取得を促す教育プログラムの視点に関する考察．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要．9-2　2016　P1-22（査読論文）

(2) 寺見陽子・竹元惠子・及川裕子・松島京子・寺村ゆかの・伊藤篤．父親の養育性・役割取得を促す教育プログラムのための観点導出．神戸大学大学院人間発達環境科学研究科研究紀要．8-2　2016　P137-149（査読無）

〔学会発表〕（計　7 件）

(1) 南憲治・　寺見陽子・伊藤篤・及川裕子．父親の育児参加を阻害する要因の検討―親からの被養育経験と父親の有する愛着の影響―．日本教育心理学会第 58 回総会 2016.10.8（香川大学）

(2) Yoko Terami・Atsushi Ito・Kenji Minami・Kyo Matsushima・Yuko Oikawa・Keiko Takemoto・Yukano Teramura. Exploring factors enhancing childcare behavior and parent-role evaluation in Japanese fathers. ICP. 2016.7.28　YOKOHAMA

(3) 寺見陽子．現代の父親の家事・育児を規定する要因に関する質的研究（2)．日本保育学会第 69 回大会　2016.5.8（東京学芸大学）

(4) 寺見陽子・及川裕子・伊藤篤・南憲治．父親の養育性を規定する要因に関する研究―親からの被養育経験と幼少期の養育経験・子育て生活との関連―.日本発達心理学会第 27 大会．　2016.4.30（北海道大学）

(5) 南憲治・及川裕子・伊藤篤・寺見陽子．父親の育児行動を規定する要因に関する研究―親からの被養育経験と愛着の視点から―．日本発達心理学会第 27 大会　2016.4.29（北海道大学）

(6) 寺見陽子．現代の父親の家事・育児を規定する要因に関する質的研究（1)．日本教育心理学会第 69 回大会 2015.8.26（新潟：朱鷺メッセ）

(7) 松島京・竹元惠子．現代の父親の子育て・親育ち－父親の語りから－ 日本保育学会第 68 回大会　2015.5.9（椙山女子大学）

〔その他〕（計 3 件）

(1) 寺見陽子・松島 京・南 憲治・伊藤篤・寺村ゆかの・竹元惠子．父親の子育て・親育ち～父親支援プログラムのあり方をめぐって～　日本発達心理学会第 26 回大会．自主シンポ．2016.4.30（北海道大学）

(2) 寺見陽子・及川裕子・竹元惠子・伊藤篤・松島京．「親の価値・子の価値」－関係の系としての親・子・育児を考える－」　日本保育学会自主シンポ．　P20. 2014.5.8（大阪保育総合大学）

(3) 寺見陽子・及川裕子・竹元惠子・松島京・伊藤篤．関係の系としての親・子・育児を考える－親になる養育性の形成と支援の課題の検討－．　日本発達心理学会第 25 回大会自主シンポ．p70　2014.3.21（京都大学）

６．研究組織

(1) 研究代表者

寺見　陽子(TERAMI, Yoko)

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・教授

研究者番号；20163925

(2) 研究分担者

伊藤　篤（ITO, Atstushi）

神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号；20223133

南　憲治 (MINAMI, Kenji)

京都橘大学・人間発達学部・教授

研究者番号；00122284

及川　裕子 (OIKAWA, Yuko)

人間総合科学大学・保健医療学部・教授

研究者番号；90289934

竹元　惠子 (TAKEMOTO, Keiko)

四條畷学園大学・看護学部・准教授

研究者番号；50530599

松島　京 (MASTUSHIMA, Kyo)

近大姫路大学・教育学部・准教授

研究者番号 ; 20425028

寺村　ゆかの (TERAMURA, Yukano)

神戸大学大学院・発達環境学研究科・補佐員

研究者番号；90531690